

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22330183

研究課題名（和文）足利事件における虚偽自白の生成過程および発見失敗現象の心理学的解明

研究課題名（英文）Psychological analysis of generation and oversight process of false confession in Ashikaga case

研究代表者

高木 光太郎（TAKAGI KOTARO）

青山学院大学・社会情報学部・教授

研究者番号：30272488

研究成果の概要（和文）：

足利事件において虚偽自白が発生した過程と、その後の捜査・裁判においてそれが見過ごされた原因を心理学的な視点から検討した。その結果、取調官と被疑者のコミュニケーションへの参加様式に食い違いが生じ、それが修正されないまま取調べが進行してしまったことが虚偽自白発生の主要な原因であることが明らかになった。また裁判の過程でDNA鑑定など科学鑑定の詳細に踏み込むコミュニケーションが行われなかったことが虚偽自白の見過ごしに結びついたことも示された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of present research is to examine the generation and oversight process of false confession in the investigation and the criminal trial of Ashikaga case. Discourse analysis of police and prosecutor's interrogation shows that the uncontrolled discrepancy of "participation styles" between the interrogators and the suspect is the major cause of false confession in the case. It is also suggested that incomplete judicial inquiry concerning scientific evidences such as DNA analysis is the remote cause of oversight of false confession.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	10,100,000	3,030,000	13,130,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、社会心理学

キーワード：足利事件、虚偽自白、取調べ、科学鑑定、スキーマ・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

足利事件は1990年5月12日に栃木県足利市で発生したわいせつ誘拐殺人死体遺棄事件である。この事件では菅家利和氏の有

罪が確定したが、2009年に実施されたDNA再鑑定によって冤罪であることが判明した。本研究の研究代表者および研究分担者は足利事件の二審段階で弁護団より依頼をうけ

菅家氏の自白の信用性評価を行い、それが虚偽である可能性を示唆する兆候（体験記憶供述と犯行行為供述における文体の食い違い）を発見した。この際に開発した分析手法はその後「スキーマ・アプローチ」として展開され、信用性評価事例を蓄積するとともに、虚偽自白の兆候や心理学的要因に関する実証的、理論的成果も生み出してきた（たとえば大橋ら, 2002; 高木・大橋, 2005; Mori, 2009）。だが、このように信用性評価研究を通して発見された諸兆候と虚偽自白との関係をさらに精密に検証することは「虚偽の可能性のある自白」を対象にする信用性評価研究の枠組みでは困難である。この問題の解決には虚偽自白であることが確実な事例、特に録音記録など取調べ場面の逐語的記録を用いた分析が不可欠だが、こうした分析が可能な事例は日本ではこれまで全く存在しなかった。このため日本における虚偽自白研究は、近年一種の行き詰まり状況に陥っていた。しかし足利事件の再審で菅家氏の無罪が確定し、同事件の主任弁護人の協力によって取調べ場面の録音記録を含む新資料を分析できる見込みが得られたことから、この状況が大きく変化する可能性が生まれた。虚偽自白研究にとって千載一遇とも言えるこの機会を生かす必要があること、および足利事件以降に実施してきた信用性評価研究から、虚偽自白の発生過程だけではなく発見失敗現象も含めたより包括的な分析の必要性が明らかになっていたことから、本研究を着想するに至った。

<文献>

Mori, N. (2009). The schema approach: A dynamic view on remembering. In J. Valsiner, P. C. M. Molenaar, M.

C. D. P. Lyra, & N. Chaudhary (Eds.) *Dynamic process methodology in the social and developmental sciences*. New York: Springer, pp.123-140.

大橋靖史・森直久・高木光太郎・松島恵介 (2002). 心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド 北大路書房
高木光太郎・大橋靖史 (2005). 供述の信用性評価における言語分析的アプローチの展開 心理学評論, 48-3, pp. 365-380.

2. 研究の目的

本研究の目的は、菅家氏が虚偽自白に陥る過程と、捜査機関および裁判所による虚偽自白の見過ごしを事例として、虚偽自白の発生過程および発見失敗現象の心理学的メカニズムを解明することにある。分析では捜査・裁判資料、関係者へのインタビューなどのデータを収集したうえで、虚偽自白発生および発見失敗の経緯を特にコミュニケーション過程に注目して分析し、そこに作用する心理学的諸要因の解明を試みる。さらにこの知見を先行研究・事例と関係づけ、より一般的な虚偽自白理論の構築を試みる。

3. 研究の方法

2010年度は(1)研究全体の準備となる資料データベースの作成と、(2)データベース化された資料の予備的な検討を通して基本的な分析戦略の設定を行った。具体的には取り調べにおける被疑者と取調官の直接的な相互行為(コミュニケーション)を基本的な分析レベル(分析単位)とし、この特性をある程度解明した上で、それとより広い組織的、制度的文脈との結びつきを解明するという分析戦略を設定した。この戦略に基づき取調べ録音テープの反訳資料にみられる被疑者と取調官のコミュニケーションへの参加様

式に着目した相互作用分析を集中的に行った。

2011年度は(1)取調べ録音テープの反訳資料の分析を継続すると共に(2)足利事件における法律家の意思決定にDNA鑑定や精神鑑定といった科学鑑定が与えた影響についての検討を行った。(1)については、被疑者と取調官のコミュニケーションへの参加様式に食い違いに注目する相互行為分析を試みた。(2)については法律家による科学鑑定の意味づけの変化を、供述信用性評価で用いる変遷分析の手法を援用して検討した。

2012年度は取調べ録音テープの反訳資料の分析と科学鑑定をめぐる法律家のコミュニケーション過程の分析によって見出された諸特徴を、日本の捜査機関、裁判所の制度的、文化的特徴などより広い組織的、制度的文脈との結びつきにおいて捉えることが試みられた。

4. 研究成果

本研究では足利事件における虚偽自白の発生および発見失敗の主要な原因として、被疑者取調べのあり方、およびDNA鑑定等の科学鑑定の理解・評価のあり方に注目し、相互行為論的な水準でその問題点を解明することを試みた。その結果、以下のことが明らかになった。まず被疑者取調べにおいては、取調官が依拠する司法のシステムを前提としたコミュニケーションの枠組み(法律人フレーム)を被疑者が共有しないまま、個別的な供述特性(スキーマ)に基づいた応答を繰り返すというミスマッチが生じていたにもかかわらず、そのズレが表面化せずに取調べが進行することによって、あたかも真犯人の自白であるかのような被疑者供述が得られてしまうというプロセスが確認された。通常のコミュニケーションで話者たちは特定のフレームを共有し、それに準拠してそれぞれ

発話を行う。しかし足利事件の取調べでは、警察段階、検察段階共に、犯罪の構成要件に関連する情報の収集という目的を明確に設定し、それに従って論理的に見通しを立てて被疑者に働きかけようとする取調官の法律人フレームを被疑者が共有しないまま、個々の質問にその都度、曖昧な(多様な解釈が可能となる)応答をし、それを取調官がフレームに基づく応答として解釈していくという構図が反復されていた。この構図においては、しばしばコミュニケーションが混乱するはずであるが、実際には被疑者の曖昧な応答を取調官が法律人フレームに従って解釈し、またそれに基づいて促しや補足(scaffolding)を行うことによって、混乱が速やかに回収されていた。その結果、被疑者が直接的あるいは間接的に示す無実の兆候を取調官が発見する機会が繰り返し失われ、取調べ段階における虚偽自白の発見失敗という重大なミスに結びついた。

これは先行研究が指摘していた類型である「悲しい嘘」型(浜田, 2001)の虚偽自白、すなわち取調べのつらさを回避するため被疑者が、取調官の意図(フレーム)を受け入れて積極的に真犯人を「演じる」ようになるタイプの虚偽自白とは異なる、本研究によって新たに見いだされた類型であると考えられる。このタイプの虚偽自白は表面上穏やかなコミュニケーションとして展開するため、取調べの当事者にとっても、それを事後に検証する裁判官・裁判員や研究者にとっても、「悲しい嘘」型の虚偽自白に比べて発見が困難となる可能性が高い。これが足利事件において虚偽自白が発見困難となった相互行為論的な水準での主要な原因であったと考えられる。

科学鑑定の理解・評価については、法律家が依拠するコミュニケーションのフレーム

と、鑑定人となった科学者のそれに齟齬が生じているために、鑑定の特質について十分な情報が得られていないにもかかわらず、それを放置しコミュニケーションを終了してしまうというパターンが繰り返し観察された。具体的には事象を確率論的に把握する鑑定人のフレームと、個別事例について確定的な理解を求める法律家のフレームに大きな齟齬が生じていたが、公判廷での鑑定人への質問は、こうした齟齬が明確化する前に打ち切られていた。これによって科学鑑定の結果や方法が本来もつ意味が法廷で明らかにならず「ブラックボックス化」してしまい、鑑定の性質について重要な理解が阻害された可能性が高いと考えられた。各段階の判決においても「ブラックボックス化」の影響が確認された。

このように本研究における検討を通して、足利事件においては取調べ段階、公判段階ともに無実の発見に結びつく重要な兆候が、コミュニケーションの不全状態によって見過ごされてしまった可能性が高いことが明らかになった。この知見は、刑事裁判における虚偽自白等の「司法事故」の発生を抑止するためには、法・規則の整備や司法関係者の意識の改革だけではなく、被疑者・被告人を含む関係者のコミュニケーションを適切化する「コミュニケーション・デザイン」の視点が不可欠であることを示唆するものである。

このように虚偽自白を伴う冤罪の発生過程をコミュニケーション不全という視点で解明した試みはこれまでなく、この点で本研究は内外の法心理学研究に意味のある貢献をするものであると考えられる。また従来とは異なる視点で虚偽自白の発生とその見過ごしの過程を解明したことにより、捜査および裁判実務に対しても、新たな改善の提案が可能になるものと期待できる。この点で本研

究の知見は日本の捜査および裁判実務に対しても有用性を持つものであると言える。

<文献>

浜田寿美男 (2001) 目撃証言の真偽判断とその方法 渡辺保夫 (監修) 一瀬敬一郎・巖島行雄・仲真紀子・浜田寿美男 (編著) 目撃証言の研究—法と心理学の架け橋をもとめて pp. 268-343. 北大路書房.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 松島恵介 2012 足利事件における虚偽自白の検証—取調べテープにおける菅家氏の自白語りの特徴について (1) 龍谷大学国際社会文化研究所紀要, 14, 205-227. (査読なし)
- ② 高木光太郎 2012 知的障害者の供述特性からみた可視化と取調べの高度化 自由と正義, 63(12), 35-39. (査読なし)
- ③ 渡辺由希・大橋靖史 2012 被尋問者による応答が法廷証言において果たす役割—借用された言葉が及ぼす効果— 法と心理, 12, 98-109 (査読あり)
- ④ Mori, N. 2011 Where are we going beyond the archive metaphor? Culture & Psychology, 17(1), 11-19. (査読あり)
- ⑤ 森 直久 2010 実践に適合した研究を目指して—記憶の信用性評価を手がかりに— 札幌学院大学心理臨床センター紀要, 10, 91-99. (査読なし)
- ⑥ 森 直久 2010 語りによる体験の共約可能性 質的心理学フォーラム, 2, 27-36. (査読あり)
- ⑦ 大橋靖史 2011 私たちの過去の事実は

わからないが、… -真偽不明な過去の想起への2つの研究アプローチ- 淑徳大学研究紀要, 45, 117-134. (査読なし)

[学会発表] (計 14 件)

- ① 森直久・松島恵介・後安美紀 2012 S 氏の取調べコミュニケーションの分析法と心理学会第13回大会ワークショップ『司法事故調査』の事例研究への心理学的アプローチ(3)-足利事件における虚偽自白生成および発見失敗現象の相互作用論的分析- 話題提供 (2012年10月21日、武蔵野美術大学)
- ② 大橋靖史・渡辺由希 2012 科学鑑定をめぐるコミュニケーションの分析法と心理学会第13回大会ワークショップ『司法事故調査』の事例研究への心理学的アプローチ(3)-足利事件における虚偽自白生成および発見失敗現象の相互作用論的分析- 話題提供 (2012年10月21日、武蔵野美術大学)
- ③ Hara, S. 2012 Confirming Feedback Effect for Confidence Judgment on the Delayed Photograph Lineup Identification. Presentation at the 30th International Congress of Psychology. (25 July, Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa)
- ④ Mori, N. 2012 The third accountability shows signs of 'being experiencers': A contribution to forensic psychology. Presentation at the 30th International Congress of Psychology. (25 July, Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa)
- ⑤ Takagi, K. 2012 "Direct confession bias" in suspect interview. Presentation at the 30th International Congress of Psychology. (26 July, Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa)
- ⑥ 後安美紀 2011 想起する身体:消えたマイクロスリップをめぐる語りの心理・言語学的考察 法と心理学会第12回大会発表(名古屋大学、2011年10月1日) (第1回大会発表賞受賞)
- ⑦ 原聰 2011 控訴審における取調べ側と判決のフレーム 法と心理学会第12回大会ワークショップ「司法事故調査」の事例研究への心理学的アプローチ(2)-足利事件における虚偽自白生成及び発見失敗に科学鑑定が与えた影響を中心に」話題提供(2011年10月1日、名古屋大学)
- ⑧ 松島恵介 2011 冤罪・足利事件における<被疑者×取調官>のコミュニケーション分析 日本心理学会第75回大会ワークショップ「コミュニケーションを関係論的に分析する」話題提供(2011年9月16日、日本大学)
- ⑨ 森直久 2011 体験の質は想起の形式に現れる-二例目の分析- 日本心理学会第75回大会発表(2011年9月15日、日本大学)
- ⑩ 大橋靖史 2011 関係の中における個のふるまい 日本質的心理学会第8回大会シンポジウム『『個性』の質的研究-個をとらえる、個をくらべる、個とかかわる-』話題提供(11月27日、安田女子大学)
- ⑪ 大橋靖史 2011 一審裁判過程における科学鑑定および自白の扱い 法と心理学会第12回大会ワークショップ「司法

事故調査」的事例研究への心理学的アプローチ(2) - 足利事件における虚偽自白生成及び発見失敗に科学鑑定が与えた影響を中心に」話題提供(2011年10月1日、名古屋大学)

- ⑫ Ohashi, Y. 2011 Reconsidering studies in socio-cultural remembering: Finding a locus of false remembering. Presentation at the 3rd ISCAR Congress. (6 September, Rome, Italy)
- ⑬ 高木光太郎 虚偽自白事例から取調べの科学科について考える 法と心理学会第12回大会シンポジウム「エビデンスにもとづく取調べの科学化」話題提供(10月2日、名古屋大学)
- ⑭ 高木光太郎・松嶋恵介・森直久 2010 『司法事故調査』的事例研究への心理学的アプローチ(1)-足利事件における虚偽自白生成および発見失敗現象の検証を事例として-」話題提供 法と心理学会第11回大会ワークショップ(2010年10月16日、立命館大学)

[図書] (計2件)

- ① Mori, N. 2010 Remembering with others: The veracity of an experience in the symbol formation process. In B. Wagoner (Ed.) Symbolic transformation: The mind in movement through culture and society. London: Routledge, pp. 142-158.
- ② 高木光太郎 2010 「誤接続」と「住み込み」-足利事件における虚偽自白過程のコミュニケーション分析 西井凉子(編) 時間の人類学-情動・自然・社会空間 世界思想社 pp. 226-253.

[産業財産権]

- 出願状況(計0件)
○取得状況(計0件)

[その他]
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 光太郎 (TAKAGI KOTARO)
青山学院大学・社会情報学部・教授
研究者番号: 30272488

(2) 研究分担者

原 聡 (HARA SATOSHI)
駿河台大学・心理学部・教授
研究者番号: 00156481

森 直久 (MORI NAOHISA)
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号: 30305883

松島恵介 (MATUSHIMA KEISUKE)
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号: 50310123

大橋靖史 (OHASHI YASUSHI)
淑徳大学・社会学部・教授
研究者番号: 70233244

後安美紀 (GOAN MIKI)
大阪市立大学・法学研究科・研究員
研究者番号: 70337616